千葉県文化財センター調査報告第196集

袖ヶ浦町上泉遺跡・永地遺跡

―（二）松川河川災害復旧助成事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 ―

1991

千　葉　県　土　木　部
財団法人　千葉県文化財センター

千葉県文化財センター調査報告第196集

袖ヶ浦町上泉（かみいずみ）遺跡・永地（えいち）遺跡

— (二)松川河川災害復旧助成事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 —

1991

千　葉　県　土　木　部
財団法人　千葉県文化財センター

序　　文

袖ヶ浦町は千葉県の中央部に位置し、房総丘陵に源を発する小櫃川が貫流し、古来よりその恵みを受け貴重な文化遺産が数多く残されています。

現在、袖ヶ浦町の海岸部は工業地域として、台地上は住宅地域として発展を遂げており、それに伴う都市化が進行しつつあります。更に、上総新研究学園都市・東京湾横断道路・東関東自動車道等の建設は一層の発展を促すものと思われます。この将来の発展をまえに、水利面に目を転ずると、小櫃川に合流する支川の一つである松川は、川幅が狭いうえ屈曲が多く、大雨のたびに氾濫し洪水に見舞われる状況が続き、そのたびに部分的な改修が繰り返されてきました。しかし、部分的改修では全流域の洪水を防ぐことができないため、千葉県では抜本的な対策として、松川の本格的な改修を災害復旧助成事業として計画しました。

ところが、この河川改修事業に際し事業予定地内に埋蔵文化財包蔵地が二か所所在していたため、千葉県土木部と千葉県教育委員会との間でその取扱いについて慎重な協議が重ねられた結果、事業の性格上現状保存は困難であり、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなりました。

発掘調査に当たっては、千葉県教育委員会の指導のもとに財団法人千葉県文化財センターが実施することとなり、永地遺跡については昭和62年７月から９月にかけて、上泉遺跡については平成２年１月から３月にかけて現地調査を実施しました。調査の結果、縄文時代より近世にわたる遺物が出土し、松川流域における遺跡のあり方を考える上で貴重な資料を得ることが出来ました。

この度整理作業も終了し、調査成果をとりまとめて報告書として刊行する運びとなりました。本書が学術資料としてだけでなく、文化財の保護・普及のため広く活用されれば幸いです。

最後に、千葉県土木部・千葉県教育委員会・袖ヶ浦町教育委員会・地元関係諸機関の御指導・御協力に深くお礼を申し上げます。

平成３年１月

財団法人　千葉県文化財センター
理事長　岩　瀬　良　三

凡　　例

1、本書は、(二)松川河川災害復旧助成事業に伴う上泉(かみいずみ)遺跡(千葉県君津郡袖ヶ浦町永地1,471-1他所在)・永地(えいち)遺跡(袖ヶ浦町永地155他所在)の発掘調査報告書である。なお袖ヶ浦町の市町村コードは481、上泉遺跡の遺跡コードは007、永地遺跡の遺跡コードは001であり、調査コードはそれらを組み合わせて上泉遺跡は481－007、永地遺跡は481－001とした。

2、発掘調査は、千葉県の委託を受け、千葉県教育委員会の指導のもとに、財団法人千葉県文化財センターが実施したものである。

3、発掘調査は、永地遺跡は昭和62年7月13日から9月30日まで実施し、上泉遺跡は平成2年1月8日から3月20日まで実施した。また、整理作業および報告書作製作業は、平成元年4月1日から4月30日までと、平成2年3月21日から3月31日まで、9月1日から9月31日までの期間で実施した。なお、発掘調査・整理作業の担当者等は下記のとおりである。

◎発掘調査

永地遺跡　調査部長　堀部昭夫　部長補佐　岡川宏道　班長　阪田正一
　　昭和62年7月13日から9月30日　担当　主任調査研究員　宮　重行

上泉遺跡　調査部長　堀部昭夫　部長補佐　阪田正一　班長　佐久間　豊
　　平成2年1月8日から3月20日　担当　主任技師　加藤正信

◎整理作業

永地遺跡　調査部長　堀部昭夫　部長補佐　阪田正一　班長　佐久間　豊
　　平成元年4月1日から4月30日　担当　班長代理　田村　隆
　　調査部長　堀部昭夫　部長補佐　佐久間　豊　班長　郷田良一
　　平成2年9月1日から9月30日　担当　主任技師　加藤正信

上泉遺跡　調査部長　堀部昭夫　部長補佐　阪田正一　班長　佐久間　豊
　　平成2年3月21日から3月31日　担当　主任技師　加藤正信
　　調査部長　堀部昭夫　部長補佐　佐久間　豊　班長　郷田良一
　　平成2年9月1日から9月30日　担当　主任技師　加藤正信

4、本書の執筆及び編集は、主任技師　加藤正信がおこなった。

5、発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の諸機関、諸氏のご指導・ご協力をいただいた。ここに深い感謝の意を表します。(敬称略)

千葉県土木部河川課　千葉県土木部君津土木出張所　千葉県教育庁生涯学習部文化課
袖ヶ浦町教育委員会　(財)君津郡市文化財センター
鴇田　武　勝呂　勉

目　　次

序　文
凡　例
第1部　概　　要
1．調査に至る経緯及び周辺地形・遺跡の概要
（1）調査に至る経緯 …… 1
（2）遺跡の立地、周辺地形・遺跡の概要 …… 1
第2部　上泉遺跡
1．遺跡の概要
（1）遺跡の概要、層序 …… 5
（2）調査区の概要・出土遺物 …… 5
2．まとめ
（1）まとめ …… 10
第3部　永地遺跡
1．遺跡の概要
（1）遺跡の概要、層序 …… 11
（2）調査区の概要・出土遺物 …… 11
2．まとめ
（1）まとめ …… 15

挿　図　目　次

第1図　上泉遺跡・永地遺跡周辺地形図 …… 2
第2図　上泉遺跡・永地遺跡周辺地形 …… 3
第3図　上泉遺跡調査区及び周辺地形 …… 6
第4図　上泉遺跡調査区・グリッド配置図 …… 7
第5図　上泉遺跡トレンチ土層断面実測図 …… 8
第6図　上泉遺跡001土壙実測図 …… 8
第7図　上泉遺跡出土遺物実測図 …… 9
第8図　永地遺跡調査区及び周辺地形 …… 11
第9図　永地遺跡調査区・グリッド配置図 …… 12
第10図　永地遺跡土層断面図 …… 12
第11図　永地遺跡出土遺物実測図 …… 14
第12図　永地遺跡出土遺物時期別垂直分布図 …… 15

図　版　目　次

図版1　上泉遺跡南全景・中央全景・北全景
図版2　上泉遺跡2トレンチ、7トレンチ、11トレンチ
図版3　上泉遺跡001土壙、出土遺物
図版4　永地遺跡遠景・全景
図版5　永地遺跡トレンチ、9D－70グリッド、9C－70グリッド
図版6　永地遺跡出土遺物(1)・(2)

第１部　概　　要

１．調査に至る経緯及び周辺地形・遺跡の概要

（１）調査に至る経緯

千葉県君津郡袖ヶ浦町は、町のほぼ中心部を小櫃川が流れている。この小櫃川には幾つかの支流があり、その内の一つに松川がある。松川は川幅が狭く曲流しているため、大雨の度に氾濫し、周辺に多くの被害をもたらしてきた。この度、千葉県土木部では松川の本格的な改修を計画し、千葉県教育委員会に埋蔵文化財の所在の有無の照会を行ったところ、埋蔵文化財包蔵地２か所が所在する旨の回答があった。そこで、埋蔵文化財の取扱いについて千葉県教育庁生涯学習部文化課と協議の結果、現状保存は困難なことからやむを得ず記録保存の措置を講ずることとなり、調査機関として財団法人千葉県文化財センターが指定され、千葉県と財団法人千葉県文化財センターとの間に、発掘調査の委託契約が締結され調査が実施された。

調査は、工事計画に沿うかたちで着手することとし、昭和62年に永地遺跡の調査を実施し、平成２年には上泉遺跡の調査を実施した。

（２）遺跡の立地、周辺地形・遺跡の概要

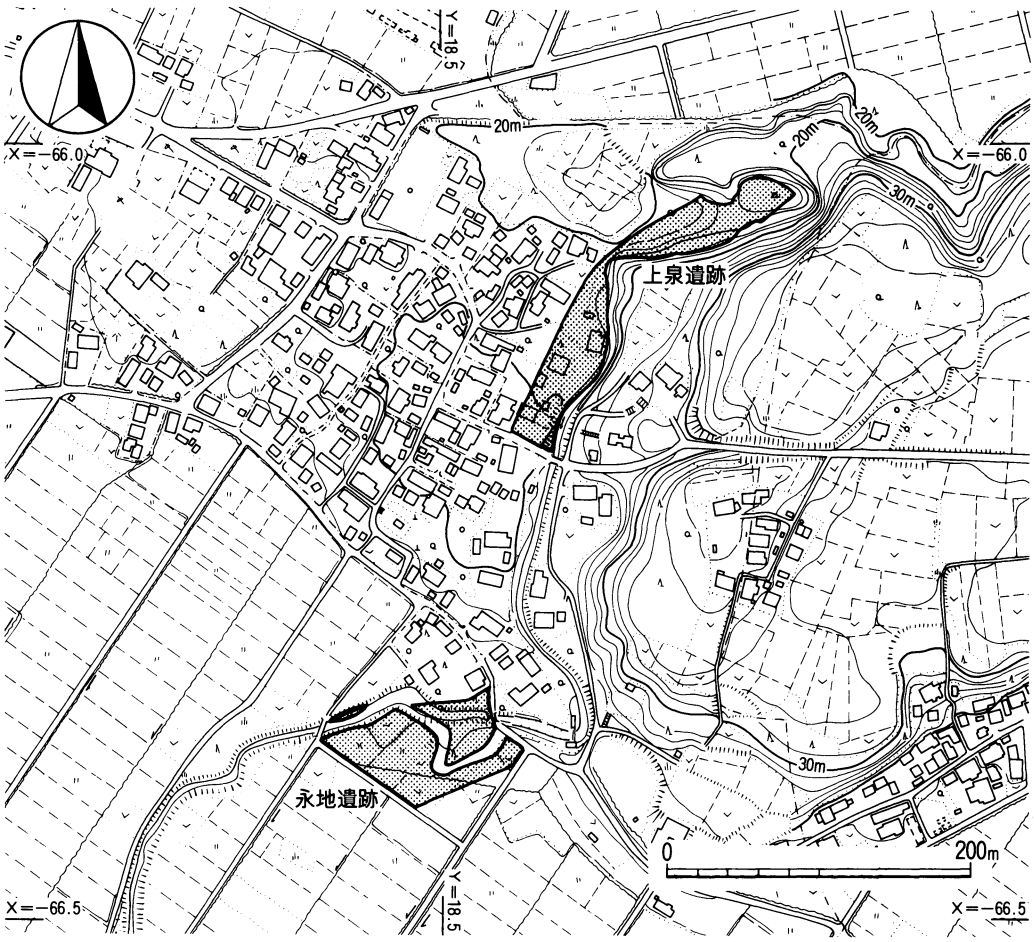
上泉遺跡・永地遺跡共に松川に接する遺跡である。樹枝状に複雑に開析された台地と沖積低地との境を蛇行しながら流れてきた松川は、台地先端部と小櫃川の沖積平野との接点部から更に曲流（メアンダー）を激しくし小櫃川に合流する。上泉・永地両遺跡は、その台地先端部と小櫃川の沖積平野との接点に位置している。小櫃川は遺跡周辺では沖積地の南端を流れ、沖積地の北端に位置する両遺跡から南を望むと、沖積地が約３㎞にわたり目前に広がり、対岸の台地との境界付近を小櫃川が流れる。遺跡周辺の沖積地の標高は約17ｍ、台地上平坦部の標高は約34ｍで比高差17ｍ程を測る。上流にあたる上泉遺跡は右岸に位置し、長さ約250ｍの細長い調査区である。遺跡は川の堆積による山砂を主とする二次堆積部分と、河岸の地山遺存部分とに分けられ、両者は基本土層も全く異なる。標高は17ｍ～20ｍ程である。永地遺跡は、上泉遺跡から約250ｍ程下流の川の両側に位置している。ほぼ全面にわたって川の二次堆積による山砂層で構成されている。標高は約17ｍ～19ｍ程である。両遺跡共に、東に台地先端部が位置し台地に上がる斜面が望まれる。

さて、上泉・永地両遺跡の周辺遺跡に目を転じると、両遺跡の東側台地上に位置する上泉遺跡（文脇遺跡・上泉古墳群）（３－第１図の遺跡番号、以下同じ）がまずあげられる。（周辺遺跡の位置・名称等は、主に千葉県教育委員会発行『千葉県埋蔵文化財分布地図３－市原市・君津・長生地区－』によった。）本遺跡は、当文化財センターで国道のバイパス用地の先行調査として昭和62年に路線の調査が行われ、さらに財団法人君津郡市文化財センター（以下君津郡市センターと略す）によって公民館建設用地の事前調査で、昭和62年から平成元年まで面的な

1. **上泉遺跡**　2. **永地遺跡**　3. 上泉遺跡（文脇遺跡・上泉古墳群）　4. 西原遺跡　5. 宮台遺跡
6. 大塚台遺跡　7. 関畑遺跡、三ッ作・宮後古墳群　8. 下新田遺跡群　9. 下野田遺跡
10. 山谷遺跡　11. 台山遺跡　12. 岩井大塚台古墳群　13. 大塚台古墳群　14. 雨久保遺跡
15. 神野台遺跡　16. 東萩原遺跡　17. 遠寺原遺跡　18. 永吉台遺跡　19. 東上泉遺跡
20. 平之台遺跡　21. 曽利田遺跡　22. 三箇遺跡群　23. 荒久遺跡　24. 大豆郷遺跡
25. 打越台遺跡　26. 打越平ヶ作古墳群　27. 打越北上原古墳群　28. 大竹白根古墳群
29. 滝ノ口向台遺跡・古墳群　30. 滝ノ口大作遺跡・上村古墳群　31. 滝ノ口大作第2古墳群
32. 塩網原遺跡・滝ノ口大作第1古墳群　33. 椿古墳群　34. 芝野遺跡　35. 雨剣遺跡　36. 下部田遺跡

第1図　上泉遺跡・永地遺跡周辺地形図

（国土地理院発行 1:50000地形図姉崎を使用）



第２図　上泉遺跡・永地遺跡周辺地形（袖ヶ浦町発行 1:2,500都市計画図を縮小編集）

調査が実施され、文脇遺跡として紹介されている。それによると、弥生時代後期から奈良・平安時代までの集落を検出し、特に弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡は約300軒検出されている。[1] またその中でも、当文化財センター調査部分の古墳時代前期の土壙墓から出土している小銅鐸が特筆される。[2] 下新田遺跡群（８）も君津郡市センターによって調査が実施されており、縄文時代から平安時代までの遺跡として知られる。[3] 遠寺原遺跡(17)、永吉台遺跡(18)も君津郡市センターによって調査され、台地上に展開する奈良・平安時代の集落と集落内寺院・土器製作遺構の検出が注目されている。[4] 次に圃場整備事業に伴う君津郡市センターの三箇遺跡群(22)は低湿地の調査として注目される。トレンチ主体の調査ではあるが非常に広大な面積の小櫃川の沖積低地を対象に調査が行われており、上泉遺跡・永地遺跡と同様に縄文式土器・弥生式土器・古墳時代前期の土師器・10世紀前後の土師器・中世陶器等が検出されている。台地との境界部付近では古墳時代以降の住居跡も検出され、台地上から低地縁辺部への集落の展開が想定される。[5]

次に、小櫃川の対岸に目を移すと打越台遺跡(25)、打越平ヶ作古墳群(26)、打越北上原古墳群(27)、大竹白根古墳群(28)等の遺跡の南側の部分が君津郡市センターによって大竹遺跡群として調査が行われている。[6] 又、当文化財センターでも滝ノ口向台遺跡・古墳群(29)の東端部分を県道建設に伴う調査として実施し、痩せ尾根上から方形周溝墓・古墳時代初頭の古墳群を、南急斜面から弥生時代中期の環濠集落を検出している。[7] 同様に、滝ノ口大作第2古墳群(31)の調査においても、痩せ尾根上から古墳群・弥生時代の集落を検出している。[8] このように小櫃川の南岸の台地上（台地といっても房総丘陵の最北端部にあたるため、やや傾斜も急で痩せ尾根が多い。）は古墳群が多くみられ、大竹遺跡群周辺の古墳群(26・27・28)や滝ノ口周辺の古墳群(29・30・31・32)のほか、更にそれらに隣接して椿古墳群(33)等の所在が知られている。小櫃川河畔低地の上・下望陀周辺は微高地となっており、古代の望陀郡衙推定地として指摘されているが、当文化財センターの芝野遺跡(34)の調査では弥生時代・古墳時代・奈良・平安時代・中・近世の遺構の検出はあったものの、郡衙に直接関連するような遺構・遺物は検出されず、今後の調査に期待が持たれる。[9]

注（1）『君津郡市文化財センター年報No 6』昭和63年12月28日・『　同　No 7』平成元年9月21日、(財）君津郡市文化財センター

（2）『千葉県文化財センター年報No14』平成元年10月20日、(財）千葉県文化財センター

（3）『境遺跡』昭和60年3月30日・『境No 2遺跡』昭和60年3月30日・『境遺跡（第2次調査)』平成元年2月21日、(財）君津郡市文化財センター、『西ノ窪遺跡』昭和60年3月31日、袖ヶ浦町教育委員会

（4）『永吉台遺跡群』昭和60年3月31日、(財）君津郡市文化財センター

（5）『三箇遺跡群Ⅰ』昭和60年3月31日・『　同　Ⅱ』昭和61年3月31日・『　同　Ⅲ』昭和62年3月31日・『　同　Ⅳ』昭和63年3月31日・『　同　Ⅴ』平成元年3月31日、(財）君津郡市文化財センター

（6）『大竹遺跡』昭和51年2月25日、千葉県文化財保護協会、『君津郡市文化財センター年報No 5』昭和62年10月31日・『　同　No 6』昭和63年12月28日・『　同　No 7』平成元年9月21日、(財）君津郡市文化財センター

（7）『千葉県文化財センター年報No14』平成元年10月20日・『　同　No15』平成2年8月24日・「君津平川線滝ノ口向台古墳群第9号墳調査概報」『研究連絡誌第27号』平成2年1月31日、(財）千葉県文化財センター

（8）『千葉県文化財センター年報No15』平成2年8月24日、(財）千葉県文化財センター

（9）同上

第２部　上泉遺跡

１．遺跡の概要

（１）遺跡の概要、層序

上泉遺跡は、調査対象面積5,925㎡で、長さ約250ｍ、幅約20ｍの細長い調査区である。松川の流路を変更するため川の拡幅、付け換え工事に必要な区域が今回の調査区となった。調査区のほぼ中央で、松川の流路方向が西行から南行に直角に変換する部分があり、そこを境にして東側部分は河川の二次堆積の山砂層の部分、南側の河岸と二次堆積の山砂層の部分とに大きく二分される。ここでも説明の都合上、東側部分と南側部分と呼ぶことにする。

南側部分は調査区の西側が河岸の地山の遺存する箇所で、東側が流路に接して山砂が堆積している。今回の調査区は、住宅・倉庫が建てられていたため、建物の基礎のコンクリート塊等が散乱し、そのうえ移転の遅れた民家が所在したため、状況に応じて確認調査区を設定した。

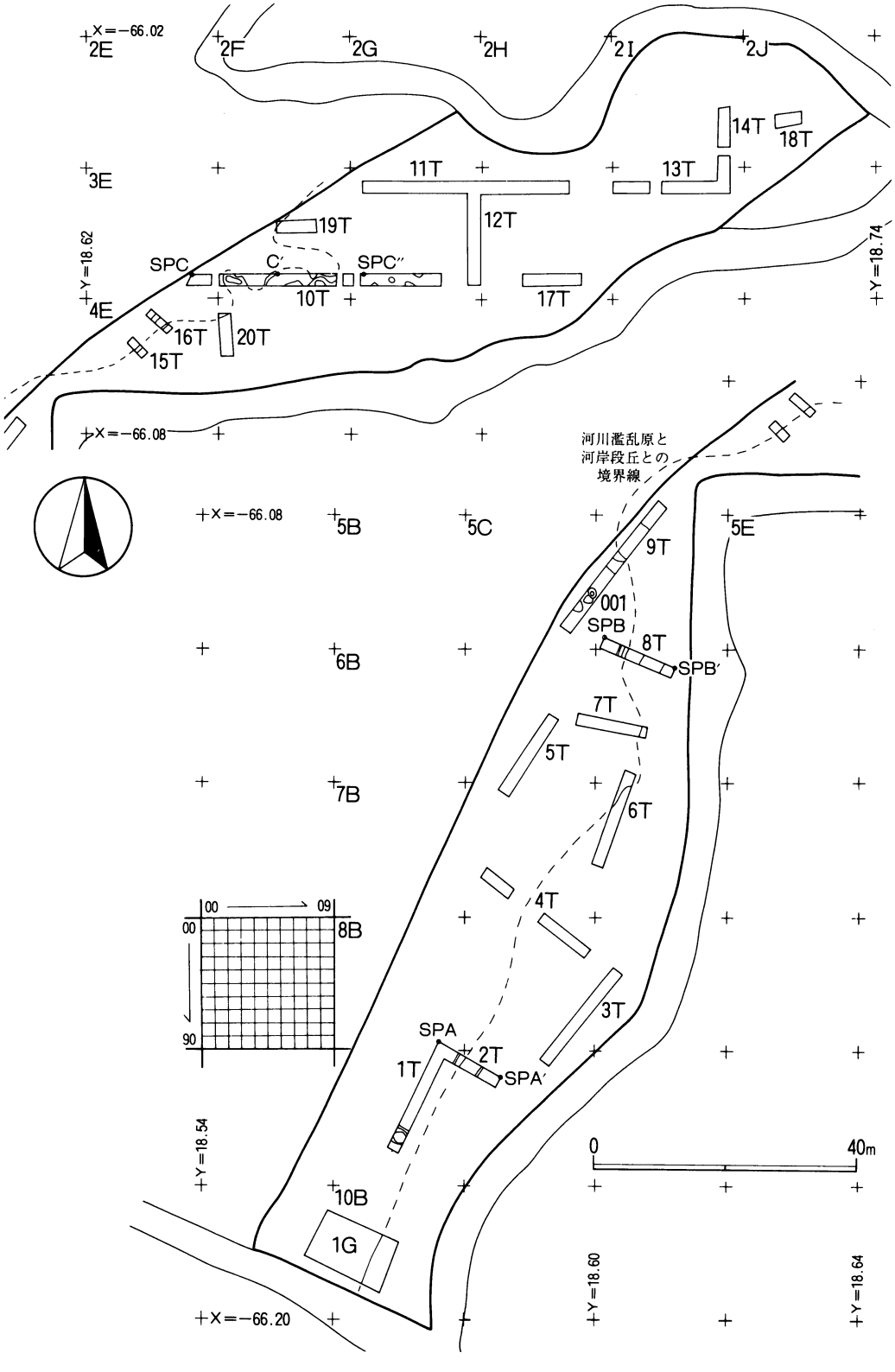
基本的な土層は南側部分と東側部分とでかなり異なるので、南側部分では２トレンチ・８トレンチを、東側部分では10トレンチを層序として取り上げた。南側部分の２トレンチ・８トレンチの河岸の地山は、武蔵野ローム層下層から下末吉ローム層上層部が表土下の地山となっており、非常に粘性の強いローム質土の地山に表土層がのっている状態であった。河岸から河川氾濫原に至る崖面は、２トレンチで比高差約３ｍ、８トレンチで約1.5ｍを測り一様な高さではない。河川氾濫原部分では、上流から流出し堆積した山砂が厚く堆積している。遺物はこの堆積層中から少量検出されている。東側部分の10トレンチは表土層から山砂層で、全て流水による堆積状態を示している。西寄りでは河岸と崖面の地山が検出されたが、それ以外の地区は全て山砂の堆積層であった。調査は河川からの湧水が激しくなった時点で終了したので山砂堆積層を全て掘り下げることはできなかった。遺物は河岸上の堆積層と、氾濫原部の堆積砂層から出土している。

（２）調査区の概要、出土遺物

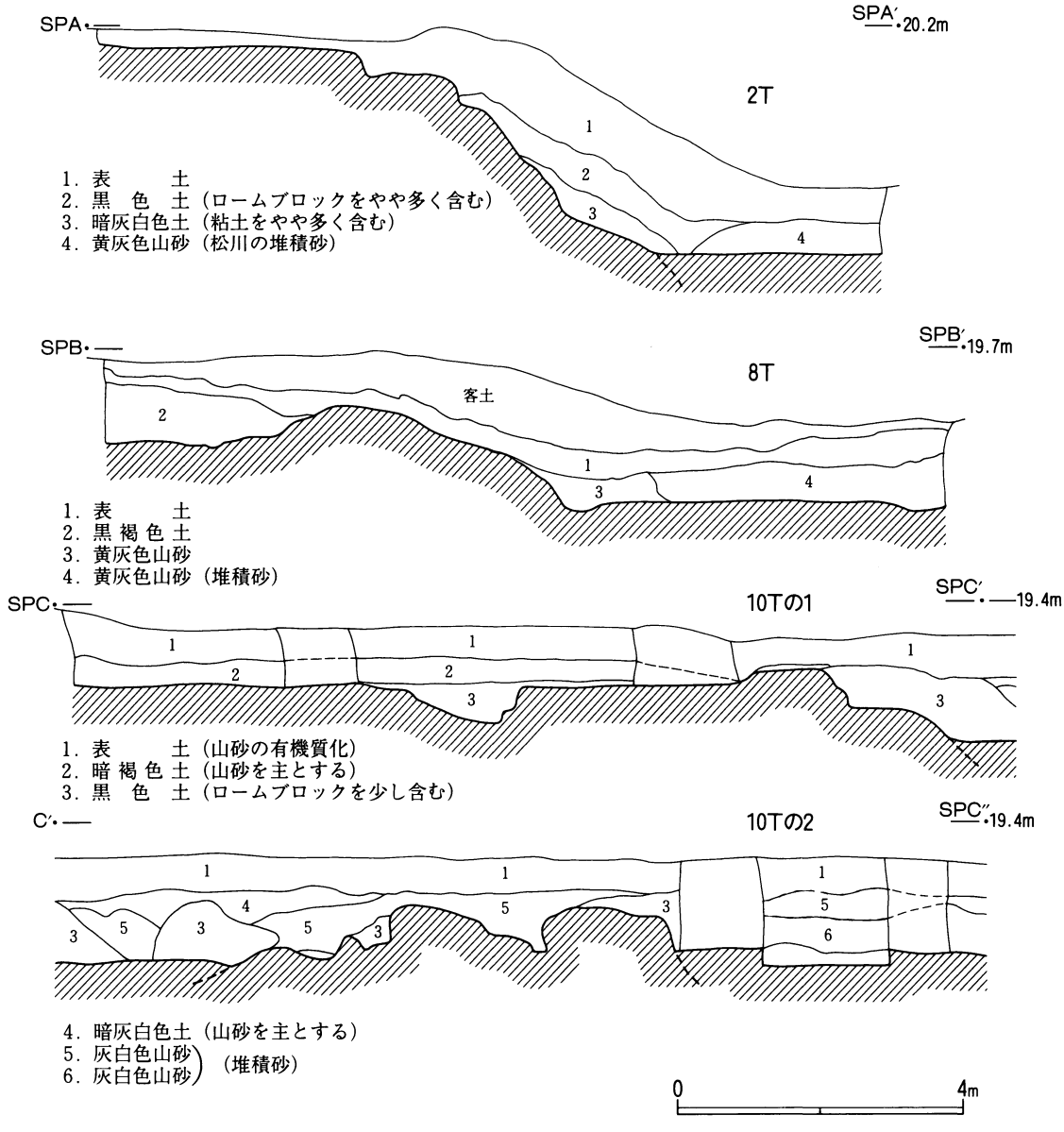
調査は南側部分から着手し、１トレンチ(１Ｔ)から20トレンチ(20Ｔ)までの20トレンチと１グリッド(１Ｇ)の調査区を設定して調査を行った。調査区内で検出された遺構は、土壙１基であるが、遺物は縄文時代から近世までのものが少量検出されている。また、遺構とは異なるが、流路内の山砂の堆積による氾濫原と、河岸の地山との境界となる崖面が確認された調査区もあった。以下に各調査区の状況について述べてみたい。

１グリッドは攪乱が著しく、地山と河川との境界である崖面を検出したのみにとどまった。遺物は検出されなかった。１トレンチは、地山部分の調査で遺構・遺物は検出されなかった。２トレンチは地山層から氾濫原への状況が確認されたが遺構は検出されず、遺物も極めて少なく６点出土したのみであった。３トレンチは氾濫原部分のみで遺構・遺物共に検出されなかっ

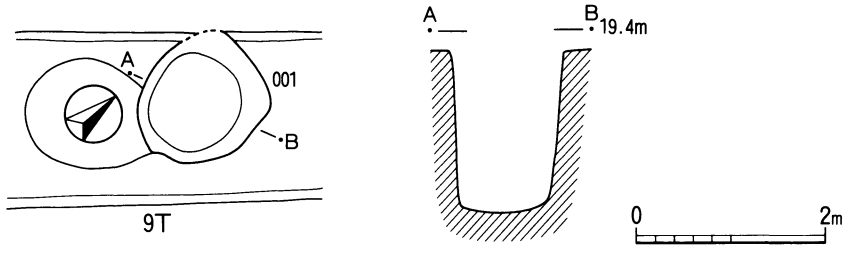
第３図　上泉遺跡調査区及び周辺地形



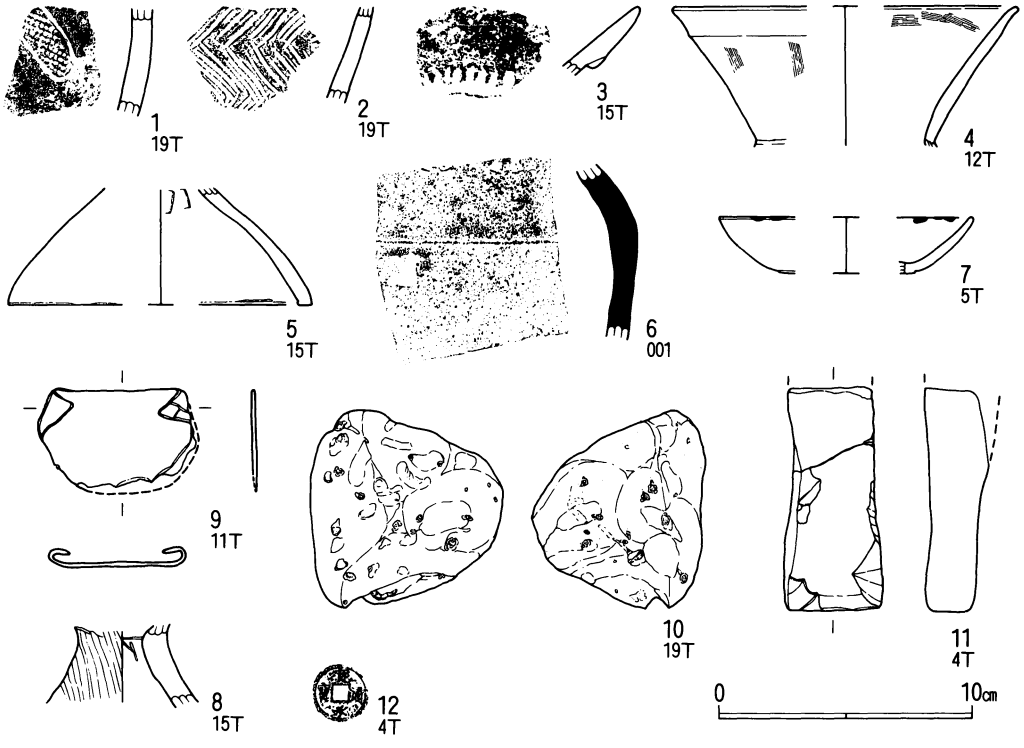
第４図　上泉遺跡調査区・グリッド配置図



第５図　上泉遺跡トレンチ土層断面実測図



第６図　上泉遺跡001土壙実測図



第７図　上泉遺跡出土遺物実測図

た。４トレンチは中央部が調査不可能で、西側は地山部分、東側は氾濫原で遺構は検出されなかった。遺物は47点出土し、陶磁器片が大半で図示できたのは砥石（第７図の遺物番号11、以下同じ）と古銭(12)のみである。５トレンチは地山部分のみで現代の攪乱が著しく遺構は検出されず、遺物は３点検出されたのみである。６トレンチは調査着手以前は、倉庫として盛り土利用されていたため状態は良くなかったが、崖面が検出された。遺物は検出されなかった。７トレンチは地山部分と崖面が確認されたが遺物は検出されなかった。８トレンチは地山部分、崖面、氾濫原が確認され、崖面の上端に地山の盛り上がりが少し認められた。遺物は検出されなかった。９トレンチは松川が西から南に直角に流路を変える地点にあたり、地山が激しく侵食されかなり急角度に切り立っていた。崖面はコンクリートの擁壁工事の際に埋め戻しが行われていた。地山部分から土壙が１基検出された。遺物は土師器・須恵器・陶磁器が計108点出土している。10トレンチは地山部分と崖面、氾濫原とが確認されている。崖面は比高は小さいが、調査区が崖面沿いにあたるため複雑な境界を示している。トレンチは未掘部分を含め39ｍの長さがあり、出土遺物は一番多かった。縄文式土器６点、弥生式土器１点、土師器188点、陶磁器８点、礫等11点の計214点が出土しているが図示できるようなものはなかった。11トレンチは氾濫原部分で遺物は土師器５点、陶磁器７点、図示した鉄製土掘り具先１点(９)が出土している。12トレンチは氾濫原部分で遺物は土師器１点(４)が出土している。13・14トレンチ

も氾濫原で遺物も少なく、15・16トレンチは崖面のみの検出にとどまり、土師器が出土している。17・18トレンチは氾濫原部分で土師器が少量出土し、19・20トレンチは崖面と氾濫原の検出で、遺物もやや多く出土している。19トレンチで縄文式土器6点、土師器52点、陶磁器等3点が検出され、20トレンチでは土師器19点、陶磁器等8点が検出されている。

001土壙は9トレンチの南端に近い部分で検出され、攪乱によって南西側を一部破壊されていた。長軸1.4m，短軸1.2m、深さ1.68mを測る。常滑焼の大甕の肩部破片が1点検出された（6）が流れ込みによるものである。時期・性格は不明である。

出土遺物は量的に非常に少なく、小破片のものがほとんどである。そのため図示できるようなものは非常に少なく、敢えて図示したために法量等については不確実なものが多い。図示した12点の内、トレンチ出土のものが11点、土壙内覆土出土が1点である。1・2は、縄文式土器である。1は沈線で区画された中に縄文が施され、2は綾杉状に沈線が施されている。3は、土師器の複合口縁の破片で内外面共に赤彩が施される。4・5・8は、土師器である。4は坩の口縁で内外面に薄くハケメが残っている。5は、台付甕の台部であろう。8は器台である。6は常滑焼の大甕の肩部の破片である。001土壙覆土より出土している。7はかわらけの灯明皿で口唇部に炭化物の付着がみられる。底部は糸切りがされている。9は鉄製品で、土掘具の先端である。両端を折り返して柄に装着できるようになっている。10は軽石で、極めて多孔質である。11は砥石で、一方が折損している。4面が使用されている。12は「寛永通寶」である。裏面は無文で古寛永といわれるものであろう。

2．ま と め

（1）ま と め

今回の調査は、地山部分と氾濫原部分とその境界の崖面の部分に対して確認調査を実施した。調査結果は地山面から土壙1基が検出されたのみで、遺物もそれほど多く出土しなかった。遺物は、調査区東側に位置する上泉遺跡（文脇遺跡・上泉古墳群）や西側に位置する台地の残存部分からの流れ込みと、松川の上流域からの流入遺物とに分けられよう。地山部分出土のものは台地上からと見られようし、氾濫原のものは両者が混在していると見られ、その点を考慮して遺跡の性格を考えるべきであるが、量的にも少なく小破片ばかりであるので、総括的にみると、中・後期の縄文式土器片、弥生式土器片、ハケメを持つ古墳時代前期の土師器片、須恵器片少量、中・近世の陶磁器片の出土から該期の遺構等の存在が想定されるし、一部調査されている上泉古墳群・文脇遺跡等の結果とも矛盾するものではない。[(1)]

注（1）「文脇遺跡」として君津郡市センター・当センターで調査が実施されている。第1部注参照。又、「上之山古墳」として『袖ヶ浦町内遺跡群発掘調査報告書』（昭和63年度、平成元年3月31日）に上泉古墳群中最大規模の古墳の確認調査がなされ報告されている。

第３部　永地遺跡

１．遺跡の概要

（１）遺跡の概要、層序

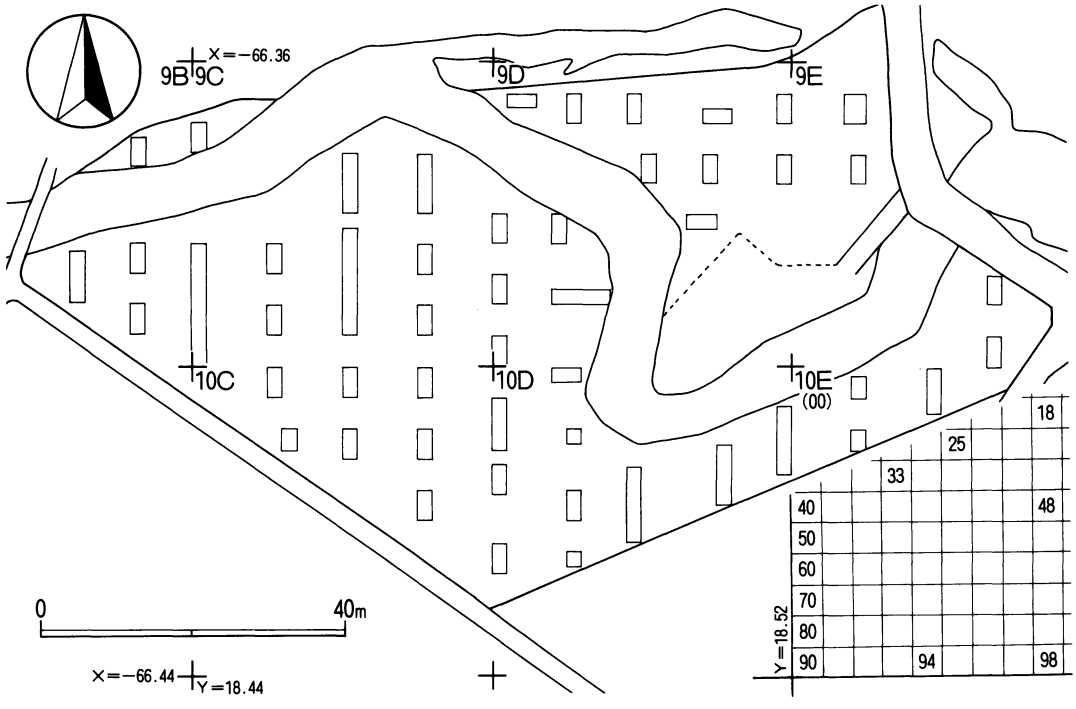
永地遺跡は、調査対象面積4,900㎡、長さ約150ｍ、幅約80ｍの調査区である。松川の流路の付け換えのため堀削工事の必要な区域が今回の調査区となった。調査区の西側は、小櫃川に続く沖積地で水田が広がり、東側は上泉遺跡（文脇遺跡・上泉古墳群）の所在する台地が目前に控え、松川が台地の縁辺から沖積地へ流れ出る地点に位置している。調査区内で松川は屈曲し、上流から南行してきた流路が小櫃川へと向かって西行する。調査区は水田・畑として耕作され、標高17ｍから18ｍ程のところに位置する。基本的には調査区の全体が河川の氾濫原で、上流から流出した山砂の二次堆積層によって構成されているといえる。調査区の東側が台地に近接するためわずかに高く、西側に向かって非常に緩やかに傾斜するが、肉眼ではほぼ平坦に見える。

調査は公共座標に沿ってトレンチ・グリッドを設定して行った。調査区全体が氾濫原の中に位置するため土層は基本的には山砂の堆積層である。各グリッドは流水の影響によるためやや違いはみられるが、基底層とみられるマコモの泥炭を含む黒色シルト層の上に暗褐色の山砂が幾層にも堆積し、現表土の耕作層にいたる。

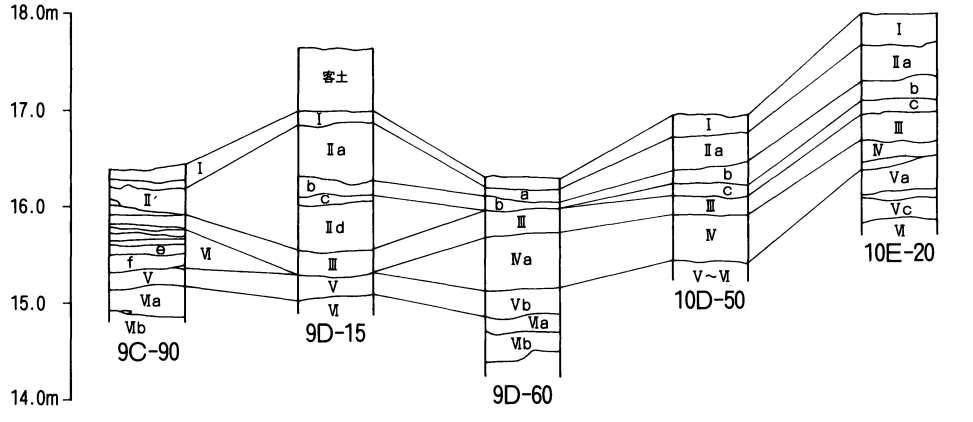
（２）調査区の概要、出土遺物

調査区の状況は、東がやや高く標高約18ｍ、西側で約16.5ｍを測り、東から西へと極めて緩い傾斜を示す。調査区内に設定したグリッド・トレンチから遺構は検出されなかったが、上泉

第８図　永地遺跡調査区及び周辺地形



第９図　永地遺跡調査区・グリッド配置図



Ⅰ（a、b）　表土、耕作土
Ⅱ（a～c、Ⅱ′）灰　褐　色　土（松川の堆積砂）
Ⅲ（a、b、b′）暗灰褐色砂質土（粘性がありしまっている）
Ⅳ（a～f）　暗　褐　色　砂（雲母を含む、鉄サビを含む）
Ⅴ（a～c）　黒　褐　色　砂（シルト質で微粒、下層に近い部分で泥炭質を含む）
Ⅵ（a、b）　黒 色 シ ル ト（マコモの泥炭を極めて多く含む、軟弱）

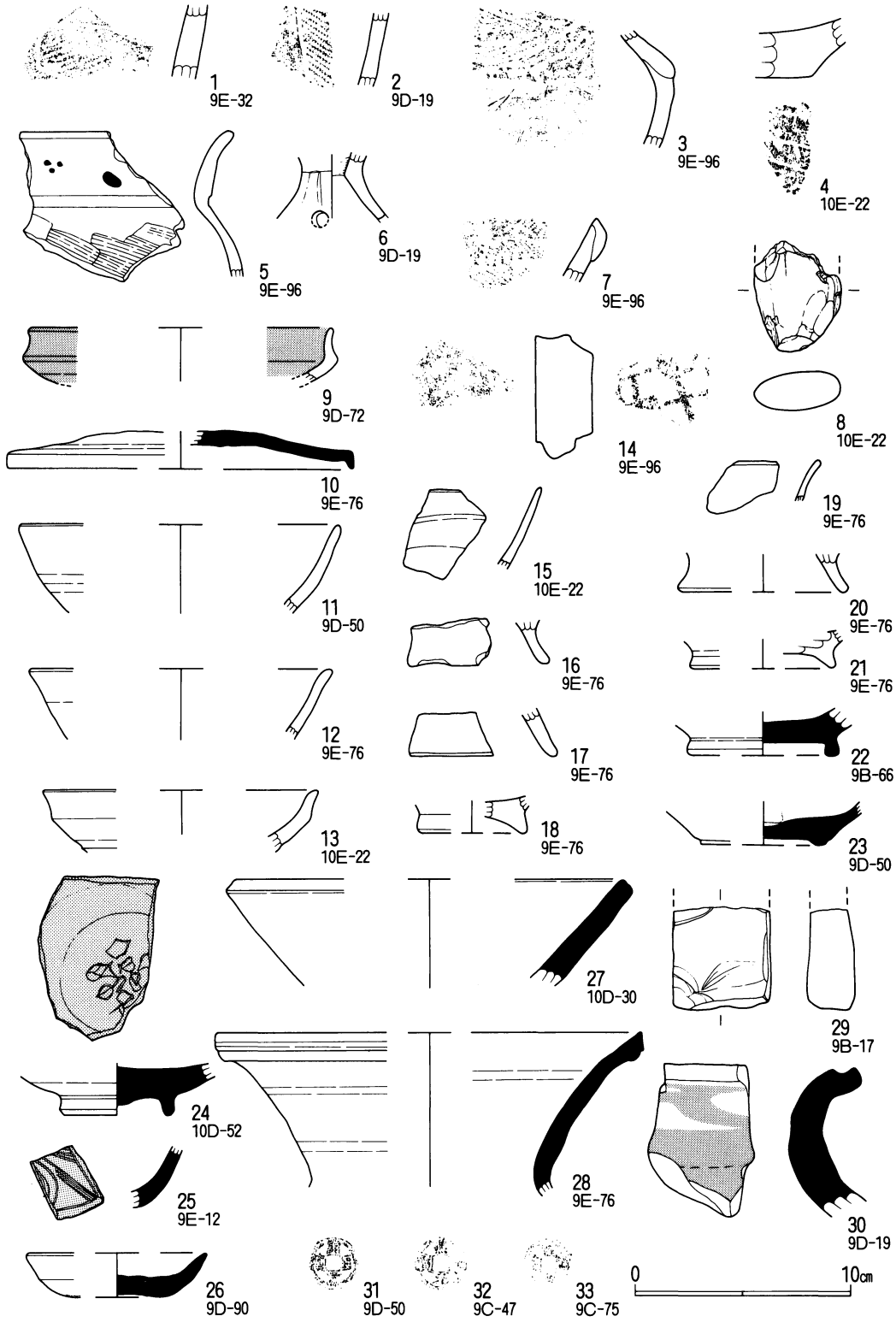
第10図　永地遺跡土層断面図

遺跡と比較すると多量な遺物が出土しており、調査区内では西側よりも東側、特に調査区最東端の９Ｅ－76・96グリッドに設定した各調査区で、９Ｅ－76は436点、９Ｅ－96は271点と多量の出土状況を示している。それ以外の調査区では最も多くても93点であるので各々約３倍、約4.7倍の出土量である。この遺物出土量の差は、出土遺物の時期・量や三箇遺跡群での調査例をみると、調査区の東側に該期の集落が展開する可能性が十分に考えられる。

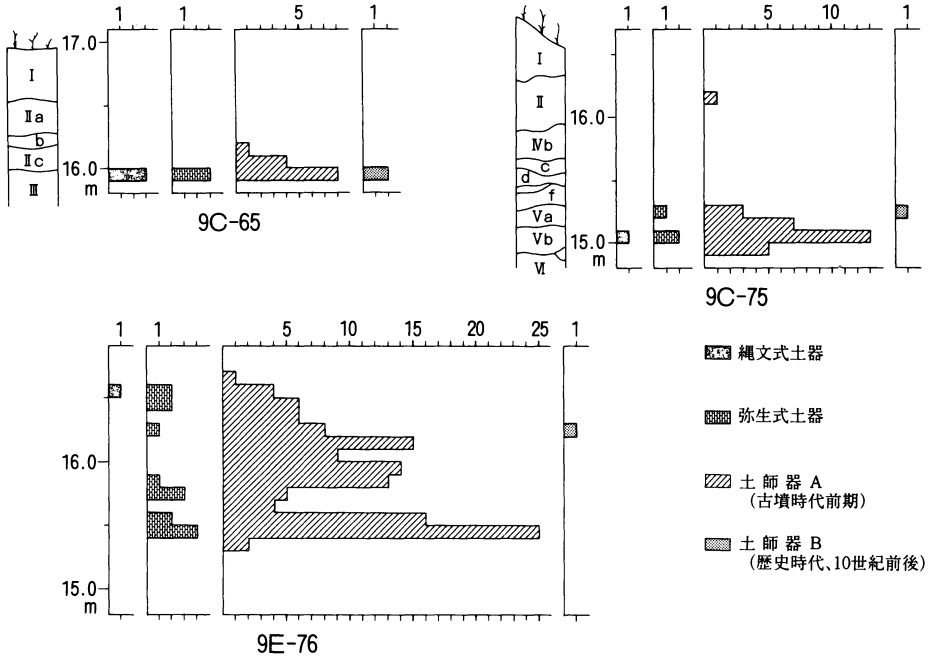
出土遺物は、上泉遺跡同様に、小破片のものがほとんどで、図示できるようなものが少ない。ここに図示した33点についても法量等について不確実な点がみられることはお断りしておく。１～４は縄文式土器である。１・２は沈線に区画された中に縄文が施されており、中期のものと思われる。３は深鉢の一部で、肩部に刻みを持つ隆帯で装飾が行われている。肩上部には斜行する沈線が綾杉状に施文されている。加曽利Ｂ式か安行式の時期のものであろう。４は底部の破片で、木葉痕が見られる。５～７・９は土師器である。５は甕の口縁部で、体部外面にはハケメが施され口唇部外面には炭化物の付着がみられる。６は器台で内面上部にはハケメがみられる。脚部の穿孔は１か所認められる。７は複合口縁の壺の口唇部である。外面には細かい縄文が施され、刻み目がみられる。９は坏で内外面全面に赤彩が施されている。５～７は古墳時代前期のもので、９は古墳時代後期のものであろう。８は石斧片で一方を折損し端部には使用による破損痕が見られる。10は須恵器の坏蓋で、上面に自然釉が少しみられる。11～13・15・19は土師器の坏の口縁部である。11・12はロクロ成形土師器で外面はヨコナデ、内面はヨコミガキがなされている。13もロクロ成形土師器で外面に明確な稜と深いロクロメが存在する。15・19は小片で19は内面が黒色処理されている。16～18・20・21は土師器坏の底部である。すべてロクロ成形で、18・21の内面は黒色処理がされている。これらは９～10世紀にかけてのものとみられる。14は平瓦の破片で表面に布目、裏面に格子のタタキメが施されている。22は灰釉陶器の瓶子の底部で内面に濃緑色の釉が施されている。23は山茶碗の底部で、糸切りの底部に糸圧痕のみられる張り付けの高台がつく、いわゆる「糸高台」の山茶碗であろう。13世紀の渥美半島周辺の製品と思われる。24・25は龍泉窯系の青磁椀で、24は底部見込みに印刻花文がみられ、25は内面に印刻の文様が施されている。26は瀬戸系の陶器小皿である。27は黒色陶質の捏鉢で 無釉である。28は大甕の口縁部で陶質の素焼きである。27・28は13世紀のものとみられる。30は常滑の大甕の破片で外面に暗緑色の釉が施される。29は砥石で一方を折損している。４面を使用している。31は「開元通寶」、32は「熙寧元寶」、33は不明銭である。

図示できなかったが調査区の各所から木片・炭化材片・獣骨等が出土しているが特徴的なものはなかった。全体的にみると、遺物の種類からは古墳時代前期の土師器・９～10世紀の土師器・13世紀の陶器に大別されるような状況がみられ周辺遺跡の時期を推し量る資料となるであろう。

今回の調査区の中で、３か所のグリッド(９Ｃ－65･75、９Ｅ－76)を取り上げて出土遺物の



第11図　永地遺跡出土遺物実測図



第12図　永地遺跡出土遺物時期別垂直分布図 (9C-65・75、9E-76グリッド)

の時期別垂直分布を表にしてみた。(第12図)遺物は縄文式土器・弥生式土器・土師器A(古墳時代前期)・土師器B(10世紀前後のもの)の4種類を取り上げて分類してみた。遺物の時期別による出土レベルの差はほとんどみられず、出土レベルによる全体的な遺物量の多少として観察されるようで、遺物の時期ごとに層序的に堆積したものではないことが知られた。特に出土遺物の多かった9E－76グリッドについても縄文式土器・弥生式土器・土師器A・土師器Bが同レベルで混在して出土しており、同様に遺物量の少ない9C－65グリッドについても同様の状況である。上泉遺跡については遺物量も少なく、又層的な調査を実施しなかった為、分類等の作業はできなかったが、永地遺跡と類似した遺跡の立地状況・氾濫原の堆積状況等からみて本遺跡同様に遺物の時期別垂直分布がみられることは無いと思われる。

2. ま と め

(1) ま と め

今回の調査区内では、遺物は多く検出されたものの遺構は検出されなかった。また、各時代の出土遺物が層的にしっかりした状態で把握することもできなかった。ただし、西側よりも東側の調査区の方が極めて多く遺物の出土していることから、調査区の東側の台地に接する部分に集落の存在する可能性があることは、君津郡市センターの三箇遺跡群の調査例から考えて十分にありうる。[(1)] 台地上の上泉遺跡（文脇遺跡・上泉古墳群）だけでなく、更に台地下の沖積低地縁辺部にも集落が展開する可能性が出て来たと考えられる。又、今回は木材・炭化材片の出土のみで木製品として取り上げられるようなものはなく、今後の調査で集落・生産遺構に伴う

木器・木製品の出土の期待が出来る。更に希望を膨らませると、望陀郡衙推定地が比較的近くに位置していることや、９～10世紀の土師器が小片ながらややまとまった出土状態を示したこと等を考えると、沖積低地全体に条里制遺構の存在した可能性も考えられる。遺跡近辺はすでに耕地整理がなされ、現在では旧来からの水田の状態を残していない。旧地籍図や古絵図等による検討や、今後の周辺の沖積低地の調査の際に配慮されることを期待する。

又、中世陶磁器や舶載磁器の出土は、今迄ともすれば見過ごされがちであった中世集落の存在の可能性を高めるものと言えよう。今後は、周辺の現集落にほぼ重複するといわれる中世集落の存在に対する関心と調査の目が、より多く向けられても良いのではないかと思える。基礎的な資料の積み重ねがされることが今後の調査・研究の発展に寄与するものと考えられる。

今回の調査は、調査区内に限っては遺構の検出もほとんど無く、遺物の出土も特に多いとも言えず、又特に目を引くようなものはなかった。しかし出土遺物の傾向・特徴から周辺の遺跡の概要・状況が、ある程度窺えたのではないかと思われる。又、今迄の調査結果や今回の成果が、周辺遺跡の遺構・遺物の時期・性格等の考察に必要不可欠な資料として位置付けられ、今後大いに活用されることを期待する。

注（１）『三箇遺跡群Ⅰ』、『同Ⅱ』、『同Ⅲ』、『同Ⅳ』、『同Ⅴ』、（財）君津郡市文化財センター発行による。

写　真　図　版

上泉遺跡南全景
（南より）

上泉遺跡中央全景
（南より）

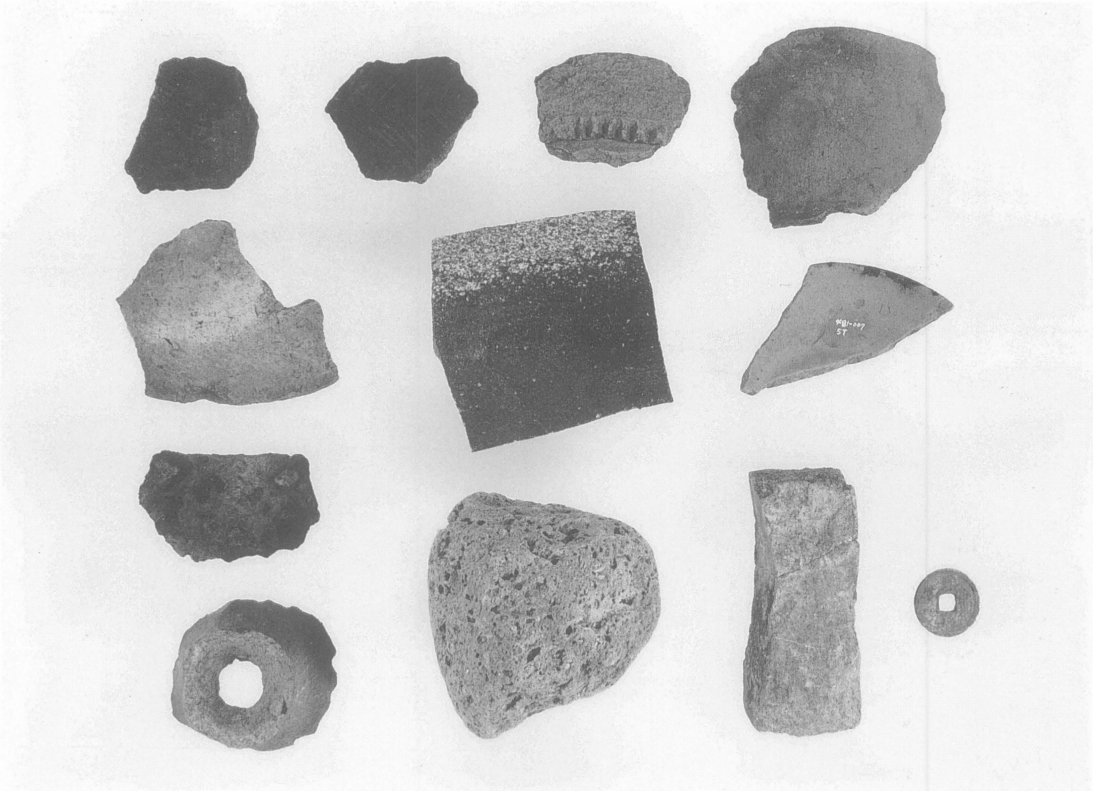
上泉遺跡北全景
（西より）

上泉遺跡
2トレンチ

上泉遺跡
7トレンチ

上泉遺跡
11トレンチ

上泉遺跡　001土壙



上泉遺跡出土遺物

永地遺跡遠景
（西より）

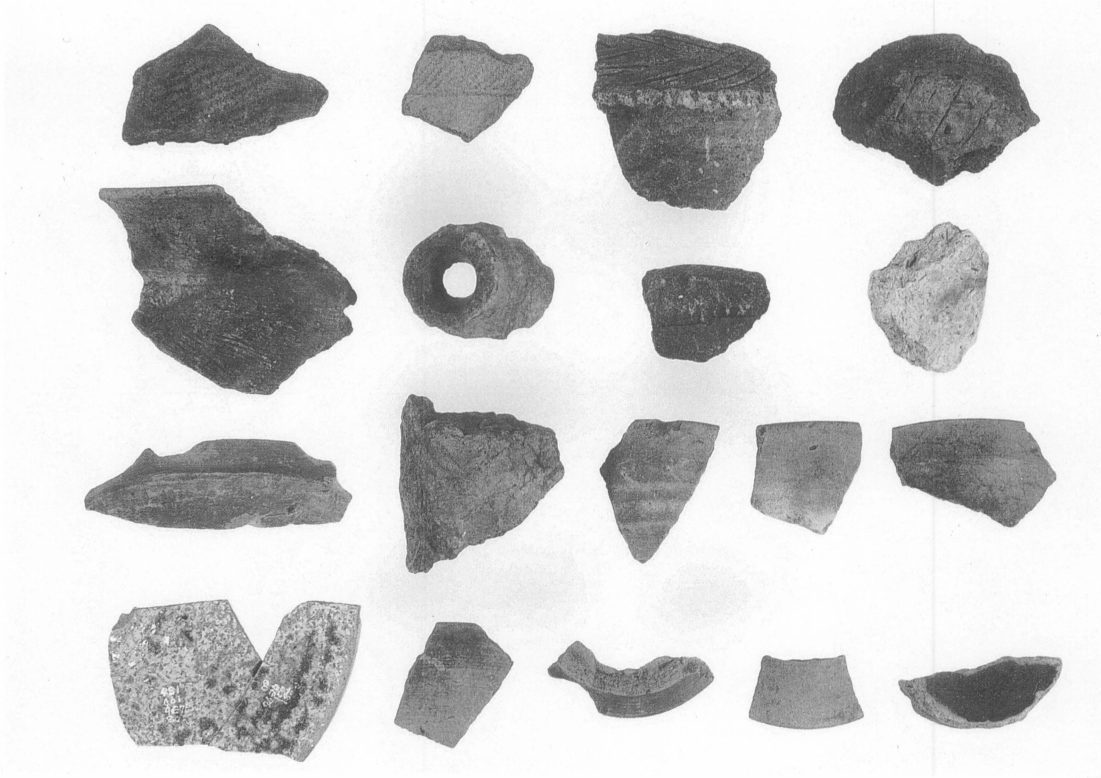
永地遺跡全景
（西より）

永地遺跡全景
（南東より）

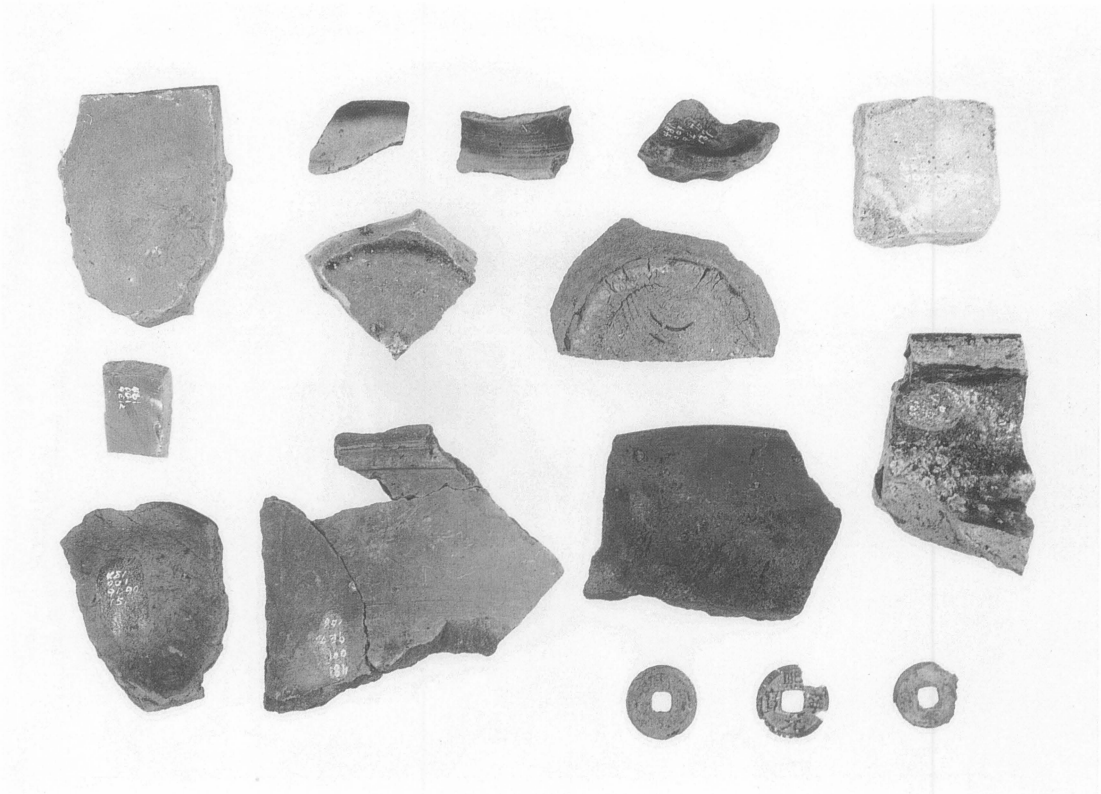
永地遺跡
トレンチ

永地遺跡
9D-70
グリッド

永地遺跡
9C-70
グリッド



永地遺跡出土遺物（1）



永地遺跡出土遺物（2）

千葉県文化財センター調査報告第196集

平成３年１月21日　印刷
平成３年１月31日　発行

袖ヶ浦町上泉遺跡・永地遺跡

—(二)松川河川災害復旧助成事業に伴う
埋蔵文化財調査報告書—

編　集　財団法人　千葉県文化財センター
発　行　千葉県土木部
印　刷　大和美術印刷株式会社